

【佳作】

一番おちつく場所

光久文乃（東京都 女子学院中学校 1年生）

少し古びたい草の匂い。私が毎日入りびたるその部屋は私が一番落ちつく部屋だ。

「畳の部屋」

幼いころよりそう呼ぶ和室。掘りごたつに床の間、鳥の掛軸。時にはひな人形や小さな笹が置いてある。

小学校低学年のころ、家に家族がおそくまで帰らず、友人のいなかった私はいつも家にいた。不満はなく、宿題が終われば自由にすごせた。

そして、その時間で私は本を読みあさった。図録や小説、教育漫画や娯楽本。分からない言葉があれば、辞典で調べた。

その時は必ず「畳の部屋」で読んだ。帰って来た母がいつも「ただいま。」

と、言っただけで畳の部屋に入ってきて

「また、ここで本読んでたの。」

と、少し呆れながら笑ってくれた。夕飯の時には、本の話をした。どの本が面白かったと話すと、次の日に机には新しい本が置いてある。得てしてそれらは同じジャンルや作家の本だった。

「畳の部屋」は私の一番身近な思い出の場所でもあった。その

ことも私を安心させる。

落ちつく理由はそれだけではない。

「畳の部屋」は夕日が障子ごしにさし、鳥の声や雨の日には雨音もよく響いた。障子とガラス窓をあければそれらは気温や匂いと共により一層よく感じられる。

夏に入ればむわっとした熱気とやかましいセミの声にむかえられ、冬にはキリッとした寒さと時が止まったような静けさをもつ。

春には鳥の声と若葉の緑を、秋には外を飛ぶ赤トンボとつつましやかな銀木犀の香りを楽しめた。

四季折々の顔を持った部屋の中は私以外の人がいることは少なくて人の声が聞こえない。

季節を感じながら好きなことをする時間は小学校で少々荒んだ心をいつもおだやかに包んでくれた。

「畳の部屋」は美しい四季と共に私をいやしてくれる部屋でもある。

本を読み、昼寝し、兄とけんかして、今までをすこしてきた「畳の部屋」は自室がある現在でも入りびたっている。

畳の上にごろりと寝ころがって、昔をなつかしみ、季節を感じつつ、夕日の色に染まった本を読む。時々寝落ちしてしまったり、気まぐれに絵を描いたりしていると、どうしようもないほど幸せで満たされているように思える。